

2014年冬のベランダバードウォッチ報告 —ツグミやシロハラは1年毎に変動する?—

バードリサーチ・日本野鳥の会栃木

今年もあっという間にサクラの季節が過ぎ、冬の間私たちを楽しませてくれた冬鳥たちもツグミやシロハラ、シメなど一部を除き、北へ帰ってしまいました。一方で、早くもノビタキやクロツグミ、ムシクイ類などの夏鳥たちの話題もちらほらと聞こえてきました。さて、2014年冬は鳥たちにとってどのような冬だったのでしょうか。冬季は人家付近の公園や小規模な林にも多くの種が生息します。また、繁殖期と違って年による変動が著しいことが知られています。身近な鳥たちの生息状況をモニタリングするベランダバードウォッチにとって、冬は格好の季節です。冬の調査は2014年の冬で10年が経ちました。はたして、ベランダバードウォッチは、冬の鳥たちの生息状況の変動をどのように捉えてきたのでしょうか。今回は、2014年冬季の調査状況を報告するとともに、冬の調査で分かった鳥たちの変動にスポットを当て報告したいと思います。

調査状況

14年冬は、北海道から九州までの合計44人の方によって、家の周りの調査が40か所で、家での調査が30か所で実施されました。13年冬までと比較すると、どちらの調査も昨年より僅かに減ったものの、ほぼ横ばい状態でした(図1)。ただ、調査地数は2009年から2011年ほど少くはありませんが、まだまだ少ない傾向が続いています。

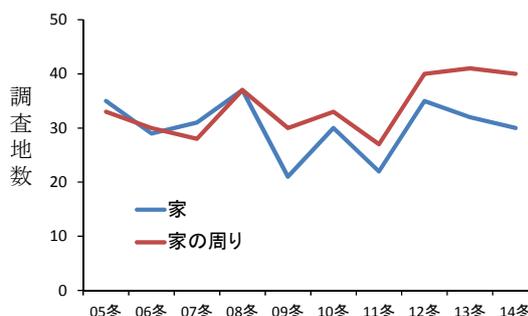


図1. ベランダバードウォッチの調査地数の推移。

記録状況

14年冬の記録種は、家の周りの調査で105種、家での調査で73種をかぞえました。その中には、スズメやヒヨドリなど市街地周辺の鳥たちに加え、カモメ類やカモ類など水辺の種やソウシチョウやガビチョウなど外来種も含まれました(付表)。記録種数は、今年も調査範囲が広く調査期間も長い家の周りの調査の方が家での調査より多く記録されました。

次に、記録率の上位10種は、家の周りの調査ではヒヨドリ、スズメ、キジバト、シジュウカラ、ハシブトガラス、ハクセキレイ、ムクドリ、ハシボソガラス、メジロ、モズ、家での調査ではヒヨドリ、スズメ、ハシブトガラス、キジバト、シジュウカラ、メジロ、ムクドリ、ハシボソガラス、ツグミ、ドバトでした(表1)。記録率の高い種の顔ぶれは、順位こそ多少違うもののどちらの調査でも概ね同じでした。14年冬は、家の周りの調査にモズとハクセキレイが加わる一方で、家での調査にツグミとドバトが入っていました。家での調査でツグミが上位10種に入っているのは、やや意外でした。ツグミは住宅地では単独で生息することが多く、単発的に記録されるため、記録率が低いよう

表1. 家での調査と家の周りの調査の記録率上位10種比較

No.	家	記録率	周り	記録率
1	ヒヨドリ	0.87	ヒヨドリ	0.96
2	スズメ	0.67	スズメ	0.91
3	ハシブトガラス	0.60	キジバト	0.80
4	キジバト	0.54	シジュウカラ	0.79
5	シジュウカラ	0.53	ハシブトガラス	0.78
6	メジロ	0.53	ハクセキレイ	0.77
7	ムクドリ	0.49	ムクドリ	0.74
8	ハシボソガラス	0.45	ハシボソガラス	0.74
9	ツグミ	0.40	メジロ	0.70
10	ドバト	0.37	モズ	0.62

に思われます。とすると、14年冬は住宅地にツグミが多かったのかもしれませんが。なお、個々の種の記録率が全体的に家での調査の方が家の周りの調査より低いのは、家での調査の調査範囲が狭いために記録される頻度が少ないためと思われます。

ツグミとシロハラ

この報告書では、冒頭でも触れましたように冬鳥の年変動にスポットを当てて解析を試みました。

まず、解析の対象種は、ある程度多くの調査地で記録されていることが必要です。地域的に偏った分布の種や生息数が少ない種では、記録率や個体数が特定のいくつかの調査地に左右されてしまいますからです。さらに、調査地は、毎年継続して調査が実施されている必要があります。そこで、今回は、冬季に全国的に生息し個体数も多い冬鳥のツグミとシロハラを対象に、その記録率と記録個体数の年変動を取り上げてみました。調査地は、2009年から2014年の冬まで継続的に調査されている家の周りの調査15か所、家での調査13か所のデータに基づきました。これらの調査地は、関東から近畿、中国、九州地方に位置していました。記録率は、これら対象とした調査地でのひと冬の記録回数の合計を調査回数の合計で除した値です。また、家での調査の平均個体数は、記録率と同様に全調査地の調査1回あたりの個体数の合計を全調査回数で除した値としました。

その結果、ツグミとシロハラの記録率は、家の周りおよび家での調査とも1年毎に著しく変動しました(図2)。そして、記録率は両調査とも概ね同じように変動しました。家の周りの調査で記録率が高い冬は両種とも2010年、12年、14年、低い年は2009年、2011年、2013年でした。家での調査では、両種とも2009年、2010年、2012年、2014年で高く、2011年と2013年が低いことが分かりました。

では個体数はどうなのでしょう？ 記録個体数の多かったツグミについてみると、調査1回あたりの記録個体数は、記録率と同じように1年毎に変動しました(図3)。たとえば、2011年は0.36羽と著しく少なかったのに翌年の2012年には4.35羽と大変多く記録され、2013年には再び減少したのです。今回調査年数が少なく解析に含めなかったほかの調査地でも同様な傾向が見られました。

これらのことから、ツグミとシロハラは少なくとも2009年以降は1年毎に記録率が変動し、それが個体数の変動とも関係していたと言えそうです。過去のバランダバードウォッチの報告書を見返してみると、2011年の冬は全国的に冬鳥が少ないとか、12年の冬は逆に大変多かったとインターネットなどの

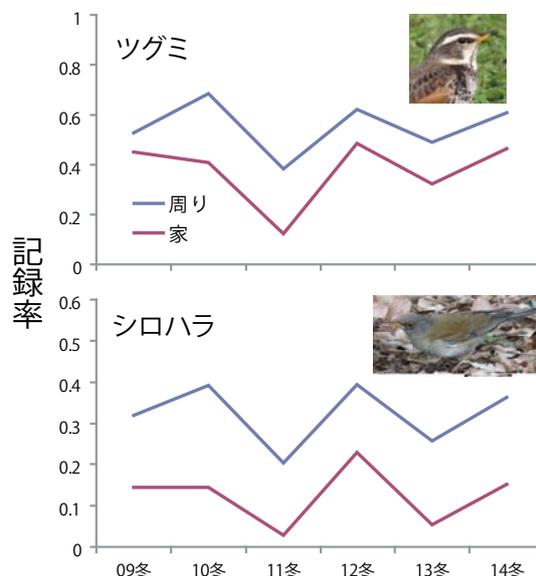


図2. 家の周りおよび家での調査によるツグミとシロハラの記録率の変動

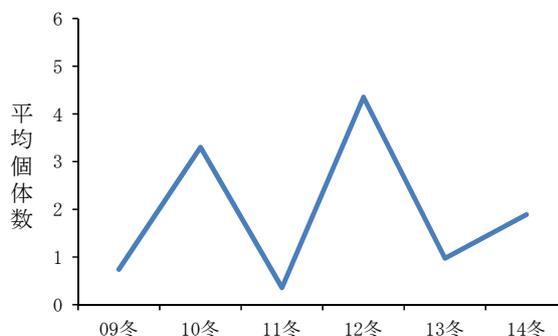


図3. 家での調査による調査1回あたりの記録個体数の変動

話題が紹介されていました。このことから、ベランダバードウォッチは身近な鳥たちの年ごとの変動を如実に捉えていると言えるのではないのでしょうか。では、このような変動は、繁殖地から日本への飛来数の変動を表しているのでしょうか。それとも、ツグミもシロハラも渡来当初は山地の木の実に群れます。また、ベランダバードウォッチの調査地は平野部に位置します。そのため、北日本や山地の森林での木の実のなり具合などと関係しているのでしょうか。残念ながら、ベランダバードウォッチの調査では、そのような年ごとの変動が起きる要因についてわかりません。詳しい要因を明らかにするには、日本各地の木の実のなり具合や山地での生息状況などさらに別の角度からの調査も必要と思われます。

最後に

今回解析に用いた調査地は関東から九州まで広い範囲にわたっています。しかし、家の周りの調査が 15 か所、家での調査が 13 か所と調査地があまり多くありません。また、解析に用いた調査年数は 6 年です。そのため、この報告書をまとめていて、常に偶然の結果ではないのかという思いが脳裏に浮かんできました。今回のツグミやシロハラの変動の検証やより精度の高い解析には、さらに多くの調査地や年数が必要です。そのためにも、今後も継続してベランダバードウォッチにご参加いただければ嬉しいかぎりです。なかなか同じ場所で定期的に長年にわたって観察を続けることは、労力的にも大変です。しかも、身近な場所では、珍しい鳥たちを見る機会もほとんどありません。しかし、お気に入りのフィールドで定期的に観察することで、身近な鳥たちの行動や生息状況についての新たな発見が得られるかもしれません。やはり、継続は力なりです。今後ともご協力よろしくお願いいたします。末尾ながら、2014 年冬の調査にご参加いただきました皆様のご芳名を記して、お礼に替えさせていただきます。

荒木廣治、飯泉 仁、石口富實枝、石原渉、上原勇一郎、上山義之、大井辰徳、大出水幹男、大塚啓子、沖田絵麻、川畑紘、吉家奈保美、熊谷高博、倉掛節子、黒沢令子、小荷田行男、小林俊子、小堀脩男、齊藤けい子、齋藤映樹、坂田樹美、笹野義一、佐藤留美子、白石健一、白石ひとみ、鈴木遼太郎、田久保若菜、田中利彦、谷本洋子、Tomoko t、長嶋宏之、中村康弘、丹羽和夫、平田輝明、平野敏明、藤原淳子、古川紀美子、三田長久、宮内晶子、宮崎征志、安田耕治、吉中康展、吉邨隆資、脇坂ヨシ子、渡辺宏之の各氏。

とりまとめ: 平野敏明

2015 年 4 月 13 日

付表. 2014年冬のベランダバードウォッチ記録種一覧

No.	種名	家	周り	No.	種名	家	周り
1	キジ	○	○	57	ミヤマガラス		○
2	コハクチョウ		○	58	ハシボソガラス	○	○
3	オオハクチョウ	○		59	ハシブトガラス	○	○
4	オカヨシガモ	○	○	60	キクイタダキ		○
5	ヒドリガモ		○	61	ヤマガラ	○	○
6	マガモ	○	○	62	ヒガラ	○	○
7	カルガモ	○	○	63	シジュウカラ	○	○
8	ハシビロガモ	○	○	64	ヒバリ		○
9	オナガガモ	○	○	65	ツバメ	○	○
10	コガモ	○	○	66	ヒヨドリ	○	○
11	ホシハジロ	○	○	67	ウグイス	○	○
12	キンクロハジロ	○	○	68	エナガ	○	○
13	カワアイサ		○	69	メボソムシクイ		○
14	カイツブリ	○	○	70	メジロ	○	○
15	キジバト	○	○	71	ヒレンジャク		○
16	カワウ	○	○	72	ゴジュウカラ	○	
17	ウミウ	○	○	73	ミソサザイ	○	
18	ゴイサギ	○	○	74	ムクドリ	○	○
19	アオサギ	○	○	75	コムクドリ		○
20	ダイサギ	○	○	76	トラツグミ	○	○
21	チュウサギ		○	77	シロハラ	○	○
22	コサギ	○	○	78	アカハラ	○	○
23	クイナ	○	○	79	ツグミ	○	○
24	バン	○	○	80	ルリビタキ	○	○
25	オオバン	○	○	81	ジョウビタキ	○	○
26	ツツドリ		○	82	イソヒヨドリ		○
27	ヒメアマツバメ		○	84	エゾビタキ		○
28	ケリ		○	85	コサメビタキ		○
29	イカルチドリ		○	86	キビタキ		○
30	ヤマシギ		○	87	カヤクグリ	○	
31	タシギ		○	88	スズメ	○	○
32	クサシギ	○	○	89	キセキレイ	○	○
33	イソシギ		○	90	ハクセキレイ	○	○
34	ユリカモメ		○	91	セグロセキレイ	○	○
35	ウミネコ		○	92	ビンズイ		○
36	セグロカモメ		○	93	タヒバリ		○
37	オオセグロカモメ	○	○	94	アトリ	○	○
38	ミサゴ	○	○	95	カワラヒワ	○	○
39	トビ		○	96	マヒワ	○	○
40	ツミ	○	○	97	ベニマシコ	○	○
41	ハイタカ		○	98	ウソ	○	○
42	オオタカ	○	○	99	シメ	○	○
43	ノスリ	○	○	100	イカル	○	○
44	フクロウ	○	○	101	ホオジロ	○	○
45	カワセミ	○	○	102	カシラダカ	○	○
46	アリスイ		○	103	ミヤマホオジロ		○
47	コゲラ	○	○	104	アオジ	○	○
48	アカゲラ	○	○	105	クロジ		○
49	アオゲラ	○	○	106	オオジュリン		○
50	チョウゲンボウ		○	107	コジュケイ		○
51	ハヤブサ	○	○	108	ドバト	○	○
52	サンコウチョウ		○	109	ホンセイインコ	○	○
53	モズ	○	○	110	ガビチョウ		○
54	カケス	○	○	111	ソウシチョウ	○	
55	オナガ	○	○		合計	73	105
56	カササギ		○				